

問題

一

〔二〕 次の傍線(a)～(d)の動詞を、例にならって文法的に説明せよ。

例 たかい子と申すいまそがりけり ↓ラ行変格活用・連用形

(1) 痛手負うて討死する者もあり。

(2) 水におぼれて死なば死ね。

(3) 親子三人^(c)念仏して居たる所に、竹の編戸をほとほと打ちたた
く者^(d)出で来たり。

『平家物語』

【二】 次の文章を読み、あとの問に答えよ。

和邇部の用光といふ^(a) 楽人ありけり。* 土佐の^(b) お船遊びにくだりて、後* 本国へのほりけるに、* 安芸国^(c) ながしの^(d) 泊にて、海賊おしよせたりけり。

* 弓矢の行方知らねば、防ぎ戦ふに力なくて、* 今は疑ひなく殺されなんと思ひて、* ひちりきを取り出だして、* やかたの上に^(a) ぬて、「*あの党や、*今は沙汰に及ばず。とく何物をも取りたまへ。ただし年ごろ思ひしめたる、ひちりきの^(b) 小調子といふ曲吹きて、聞かせ申さん。さることこそありしかと、後の物がたりにもしたまへ」と言ひければ、* 宗徒の者大きな声にて、「主たち、しばし待て。かくいふ事なり。物^(b)聞かん」と言ひければ、船をおさへて、おのおの^(c)しづまりたるに、用光、⁽¹⁾今は限りとおほゆれば、涙ながして、めでたき音を吹き出だして、思ふやうに吹きましたりけり。

海賊しづまりて言ふ事なし。よくよく聞きて、曲終るほどに、先の声にていはく、「君が船に心をかけて、寄せたりつれども、この曲の声に涙^(d)落ちて、*かたさりぬ」とて漕ぎさりにけり。たけきものの⁽²⁾ふの心を慰むる事、和歌には限らざりけり。

『十訓抄』

注 * 楽人 雅楽を奏する人。雅楽は奈良時代以降、宮廷や寺社で奏でられた音楽。

* 土佐 現在の高知県。

* お船遊び 海上での土佐神社の儀式。

* 本国 ここでは京。

* 安芸国 現在の広島県。

* 泊 港。

* 弓矢の行方知らねば 弓矢の扱い方も知らないの。

* 今は疑ひなく殺されなんぞ 今は間違いなく殺されてしまうだろう。

* ひちりき 雅楽で用いる竹笛。

* やかた 船の屋根付きの部屋。

* あの党 そこにいる者たち。

* 今は沙汰に及ばず 今は言うべきことは何もない。

* 小調子 秘曲。

* 宗徒の者 親分。

* かたさりぬ (悪事を働く心が) 消えた。

問一 傍線(a)～(d)の動詞の、(i)活用の種類と、(ii)ここでの活用形を、例にならってそれぞれ記せ。

例 言ひ ↓ (i)ハ行四段活用 (ii)連用形

問二 傍線(1)を口語訳せよ(ただし、「ば」は「～なので」という意を表す接続助詞である)。

問三 傍線(2)は(何も和歌だけではないのだ)という意味だが、和歌の他にも何があると言いたいのか。漢字二字で記せ。

【二】

解答

- (a) サ行変格活用・連体形
 (b) ナ行変格活用・命令形
 (c) サ行変格活用・連用形
 (d) カ行変格活用・連用形

解説

変格活用の動詞は数が少ないので暗記しやすい。四つしかないラ行変格活用はリズムをつけて覚えてしまおうとよい。

(1) (a) 漢語の「討死」に「する」が付いたものなので、複合のサ行変格活用の動詞「討死す」の連体形である。

ちなみに、直前の「負うて」には注意が必要である。接続助詞「て」は活用語の連用形に付くが、どの活用の種類でも、連用形の語尾が「う」音である動詞はない。したがって、「負う」はウ音便になっている。元の動詞はハ行四段活用の「負ふ」の連用形「負ひ」である。「負ふ」は現代語ならば「負う」だが、それと勘違いしないようにしたい。

(2) (b) 「死なば死ね」は慣用句で、〈もし死ぬならば死んでもかまわない（死んでしまえ）〉という意味である。「活用語の未然形＋『ば』＋活用語の命令形」で放任の気持ちを表す。文末にあり、上に係り結びを導く係助詞もないので、(b)はナ行変格活用の「死ぬ」の命令形である。なお、「ば」は接続助詞である。

(3) (c) 「念仏」という漢語に付く「し」なので、「念仏し」は複合語のサ行変格活用の動詞「念仏す」の連用形である。(d)これも動詞「出づ」と「来」とから成る複合動詞である。「出で来」と読んでいるので、

カ行変格活用の動詞「出で来」の連用形である。ここは、下にくる完了の助動詞「たり」が活用語の連用形に付く性質をもつため、連用形になったもの。

□語訳

- (1) (この戦いで) 重傷を負って討死する者もいる。
 (2) (宇治川の) 水におぼれて死ぬのなら死んでしまえ。
 (3) 親子三人が念仏を唱えて座っている所に、竹で編んで作った戸を
 とんとんと叩く者が現れた。

【二】

解答

問一 (a) (i)ワ行上一段活用 (ii)連用形

(b) (i)力行四段活用 (ii)未然形

(c) (i)ラ行四段活用 (ii)連用形

(d) (i)タ行上一段活用 (ii)連用形

問二 今は(もう)最期だと思われるので

問三 音楽〔管絃〕

解説

問一 上一段活用や下一段活用、変格活用以外の動詞について、その活用の種類を見分けるときには、打消の助動詞「ず」をつけたときの活用語尾を調べればよい。

「ず」をつけたときの活用語尾が

ア段の音↓四段活用

イ段の音↓上二段活用

エ段の音↓下二段活用

この識別法を、しっかりと頭に入れておこう。

(a)「ゐ」は「居」と書く。ワ行上一段活用の「ゐる(居る)」の連用形。直後の接続助詞「て」は活用語の連用形につく。

(b)打消の助動詞「ず」をつけると「聞かず」となるので、力行四段活用の「聞く」の未然形。直後の「ん(む)」は助動詞で、活用語の未然形につく。

(c)打消の助動詞「ず」をつけると「しづまらず」となるので、ラ行四段活用の「しづまる」の連用形。直後の「たる」は、活用語の連用形につく助動詞。

(d)打消の助動詞「ず」をつけると「落ちず」となるので、タ行上一段活用の「落つ」の連用形である。直後の「て」は接続助詞で、活用語の連用形につく。

問二 ここは問題文前半にある「今は疑ひなく殺されなんず」と重なる用光の思である。名詞「限り」には①時間や数量の限度、②ある限られた範囲、③それだけという限定、④すべてなどの意味があるが、⑤命の終わり・最期の意味もあるのでこれを選ぶ。「おほゆれ」はヤ行下二段活用の動詞「おほゆ」の已然形で、ここでは自動詞になる。〈感じる〉〈自然にそう思われる〉の意味で使われている。「ば」は設問にもあるように、〈…:…なので〉の意を表す接続助詞で、已然形に接続する。

問三 用光はこの世の名残りにとってひちりきを吹き、結果として海賊たちを感動させて危難を免れた。音楽が身を助けたのである。「管絃」と答えてもよい。

口語訳

和邇部の用光という楽人がいた(そうだ)。土佐の国での(土佐神社の儀式である)お船遊びのために(京から)下って、(儀式が済んだ)のちに京に上ったのだが、(途中の)安芸の国のなんとかという港で、海賊が押し寄せてきた。

(用光は楽人なので)弓矢の扱い方も知らないので、防ぎ戦う術もなく、

今は間違ひなく殺されてしまふだらうと思つて、(愛用の) ひちりきを
取り出して、(船の) 屋形の上に座つて、「そこにゐる者たちよ、今は言
うべきことは何も無い。すみやかにどんな物でもお取りなさい。ただし
長年心にかけて励んで来た、ひちりきの『小調子』という曲を吹いて、
お聞かせ申し上げよう。このようなことがあつた(〃今はもう死ぬとい
う時にひちりきを吹いた者がいた) ということを、あとあとの語り草に
でもなさるがよい」と言つたところ、(海賊の) 親分が大きな声で、「お
前たちよ、(襲うのは) しばらく待て。(この男が) こう言つてゐるのだ。
(その) 曲を聞いてやろう」と命じたので、(手下たちは) 船を停めて、
だれもが静まつたところ、用光は、(自分の命は) 今は(もう) 最期だ
と思われるので、涙を流して、美しい音色を吹き出して、存分に心を集
中させて吹きつづけた。

海賊たちは(すばらしい音色を聞いて) 静まり返つて声も出ない。心
ゆくまで聞いて、一曲が終わると、先ほどの声で(親分が) 言うことに
は、「そなたの船に狙いをつけて、(押し) 寄せてきたのだが、この曲の
音色に(感動して) 涙が落ちて、(悪事を働こうとする心が) 消え(去つ)
た」と言つて漕ぎ去つてしまった。荒々しい武人の心を慰め(やわらげ)
てしまうものは、和歌だけとは限らないのである。